

世界への学生を育てる： Q先生の思い出

小川勇二郎

生命環境科学研究科教授

「海外で通用する研究をするように」とは、一言も教えない。しかし、それでいて、その先生からは、毎日接するごとに、ひしひしとそのことが伝わってきた。私が教養から学部へ進学した3年次生だったとき(昔は、一般に、教養課程と学部課程がはっきりと分かれていて、それは旧制高校のなごりだ、との理由からか、大綱化、アーリーエクスポージャーなどの流れの中で、消えて行ってしまった制度であるが、今でも、そのころ教育を受けた人からは、強く支持されている教育課程ではないだろうか?)、Q先生は、講義でも、おれが世界一だ、とは言わなかった。しかし、次の年、アポロ11号が月に行って、岩石を取ってくると決まったとき、Q先生の研究室が、その岩石を真っ先に研究することに決まったのである。身をもって教える、という言葉がある。また、その人の背中を見て育つ、という言い方もする。

Q先生は、私たちの学年の「進論」の指導教官だった。「進論」とは、卒論に入る前の学年の、つまり3年次生の夏休みに、教師と学生(10名ばかり)が、寝食を伴いしながら、地質野外調査をすることであり、現在ではほとんどの大学でなくなってしまった制度だが、やはり、これも、当時を懐かしむ声強い。一般に、時代の流れに逆らえず消えてしまった制度に、復活すべき制度が多いのは、なぜだろうか?

そのころ、日本の地質学の教育で、世界的だと言われていたことが二つある。それは、学部レベルでの偏光顕微鏡を用いた岩石薄片鑑定能力であり、もう一つが、複雑な地質構造の場所での地質調査能力である。そのどちらも、それを身に付けて卒業していった理学部の地質の学部卒業生が、世界に出て行って、全く引けを取らないばかりか、現地の多くの人々を指導し続けたということが、言われている。Q先生は、その二

つの能力を、学生に徹底的に仕込んだ。まだ、地質の「ち」の字も知らない学部生にである。我々は、密かに毎日の苦痛からどうやって逃れるかを考えた。でも、妙案はなく、とにかく進論を提出するまでがんばるほかないと思い、各班ごとにとにかくやり通すことにしたのである。そのとき、Q先生は言った。「露頭に立って、分からないということのないように、とことん考えなさい。」炎天下の夏の暑さで、生存さえ危ぶまれる状況にもかかわらず、頭を使うなどはとても考えられないのに、と思ったものだ。しかし、Q先生は、それを見本で示した。

川の向こう岸に露頭があれば、自らパンツ一つになって泳いで行き、そこを自分の目で調べた。今でこそ思えば、そのような態度が、世界一であることの自信から来る、先生の確固たる教育方針だったのである。

我々はその1年後、卒論の研究室に入り、多くの者がさらに大学院に進んだ。私はQ先生の講座には行かなかった。しかし、その先輩や研究者は、全員外国に留学し、何人かは、外国の大学や研究所の教授や研究者となって行った。その研究室には、毎日世界の情報が集まるようだった。ファックスもメールもない時代だったのに。その結果の一つが、最初の月の石の研究である。

Q先生は、豪放磊落で、しかも闊達な人だった。しかし、泰然自若としてばかりい

たのではない。また、誠心誠意の人、単刀直入の人だった。すこしばかりおどけ者で、小さな失敗はよくあった。でも、すぐに謝っていた。自分の欠点を隠そうとはしなかった。こわい人であると同時に、子供のようなところのある人だった。(神田の生まれそのものだった。) 彼よりも頭脳明晰な人はいくらかもいたかもしれない。しかし、頭を非常によく使っていた。彼の弟子のある先生が、Q先生ほど、頭を使う人はいないと言っていた。つまり、努力の人だった。そのあたりが、学生から敬愛される理由だったかもしれない。

その当時の岩石学は、野外で見られる実際のありさまをどのようにして実験で示すか、Q先生の分野では、ある深さで生じるマグマがどのような条件で生じるかに絞られていた。地殻やマントルの温度と圧力や、その他の条件がどのようなものである場合に、どのようなマグマが生じるかを実験で示し、それが、また野外での産状を示すことができれば、1対1のいわゆる実証がなされる、という点にあった。

Q先生は、当時まだ、海洋がどのようなものであるかがほとんど分かっていない時点で、アメリカの学者との交流を通じて、ポイントを押さえていた。当時(1960年代)は、荒唐無稽として退けられていた、海底下に蛇紋岩がある、という説も、プリンス

トンの H. H. Hess との交流で知っていた。会う人ごとに、君はどう思うかねと聞いていた。それが、20世紀も最後の時期に、現実にあることが、海底下の研究で判明したのである。まさに、半世紀近くもかかって証明された説である。先の、マグマの生成条件についても、当時出版された唯一の地球科学書に、Q 先生は最近の成果という最終章を設けて、野外と実験との接合点を解説した。そして、近い将来高圧実験が進めば、このようなことが判明するだろう、との予測をあえて書いた。さらに、もしこの原稿があと1年後に書かれたら、その内容はさらに変わったものになっただろう、との「予言」まで、していた。案の定、実際そうになった。(予測能力は、科学者の最も大切な能力の一つである。)

Q 先生は、アポロ 11 号が最初に月面に着陸し、2人の宇宙旅行士が月面地質を調査し始めたとき、TV 出演していた。Q 先生はTV に向かって言った。「ああ、あの石を取ってきてくれたら。」それが、最後の言葉になった。まさに、壮絶な殉職であった。生き急ぐという言葉があるが、我々は、Q 先生の人生全体から、研究者としての態度を学んだのであった。

Q 先生は、いわゆる戦略というような、恣意的・政治的なことがきらいであった。それでいて、学生が自然に育っていくよう

だった。私は、当時の Q 先生と同じ年齢になって思う。世界レベルの研究をしているだろうか？と。学生を国際級に育てる、など、掛け声だけでできるものではない。私は、はっきり思う。教育に政治は不要だ、重要なのは、人間だ、と。

(おがわ ゆうじろう/地球進化科学)